

# 追悼文

川本 勝

篠原教授が亡くなられたとの知らせは、あまりにも急でした。4月4日の夜、もう12時を過ぎていつものことながら寝酒を楽しみながらそろそろ寝るとしようかな思っているところに電話のベルがなった。これもわが家のいつものことではあるが、深夜の電話は息子の友達からのことが多く、電話を無視して水割り飲んでいたら「谷口先生からですよ」と呼ばれた。受話器から届いた知らせは篠原先生の急死でした。私は、電話口で話す言葉もなく「主任さえ押しつけなければ」、「私が死に追いやってしまったのではないか」と言ったものです。やさしい谷口先生から「いやいやそんなことはないよ」と力ない声が返ってきたのを昨日のように思い出します。

篠原教授は、平成5年4月社会学科主任に就任されました。その年の3月までは私がその任についておりました。私は主任を続けるのが嫌で強引に降ろさせていただいた。学科主任になることを誰もが嫌がるものです、誰か引き受けていただければ私は主任を続けなければなりません。学科のメンバーが避けて通ろうとする主任をその時「やりましょう」と言ってくださったのが篠原先生でした。私にとっては救いの神と言えます。

それから2年間、篠原主任の時代は、大学改革のまっただ中の時期でした。その中心課題が新カリキュラムの作成でした。社会学科3コースの専門科目、そして、全学共通科目をどのようにするか大変な問題を抱えておりました。学科としては学科の特色を持たせるため新カリキュラムに独自性を発揮できるよう主張する意見が3コースから次々に主張されました。主任として3コース意

見を調整しながら新カリキュラム案をまとめるだけでも大変なところに、大学当局の案、他学部・学科との意見の相違を調整するという役を引き受けられることになったのでした。先生と廊下ですれちがったときに、少し前かがみの例の姿勢で書類をわきに抱えて「難しいね」、「やってられないよ」とふともらされたものです。そうおっしゃいながらも、淡々と学科委員会の議事を進められいつのまにかまとめてしまうという離れ技をやったのけられたのでした。先生にとっては、その間のご尽力は大変な心労ではなかったかと今さらながらお察しする次第です。篠原主任が2年かけてまとめられた新カリキュラムがやっと平成8年からスタートする運びになりましたことをご報告いたします。

新カリキュラムの作成だけではなく、新カリキュラムの実施にともなう学科改組の問題、入学学生数の問題など解決しなければならない学科の争点について、多用な意見にじっと耳を傾けながら、けっして先生ご自身の意見を押しつけることなく基本線をまとめられたのも篠原主任でした。その時の先生の寛容さと忍耐強さを思い起こします。

それらの諸々の問題にほぼ見通しがついた頃、先生はめずらしく私の研究室をたずねてこられて、「主任は1期でやめるよ、誰かやってくれないか、川本おまえもう1度やらんかね」と話された。しばらく話したあと「わかりました、私がやります」とお答えした時の先生のほっとされたうれしそうな顔を忘れることができません。思うに体調もすぐれずよほどお疲れだったのでしょう。そんなこともつゆ知らず「じゃ、いずれまた飲む機会でもつくりましょう」とのんきに話したものです。

篠原教授には、私が主任を降りるときの救いの神になっていただきましたが、私は先生の救いの神になることは永遠にできなくなりました。悔やまれます。

心より先生のご冥福をお祈りいたします。